

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19592470  
 研究課題名（和文） 地域社会の連携による潜在看護職者の再教育と就労支援に関する研究  
 研究課題名（英文） Career redevelopment support programmes for inactive nurses in community  
 研究代表者  
 田中 幸子（TANAKA SACHIKO）  
 山形大学・医学部・教授  
 研究者番号：20286371

研究成果の概要（和文）：潜在看護職者が就労できるようにするには現在就労中の看護職者のワークライフバランスが重要となる。看護職者 1,081 名を対象にした調査では、「ワークライフバランス」が取れている者ほど仕事に満足し、意欲的であることがわかった。また、生活の優先順位の理想と現実には大きなギャップが認められ、現実には仕事を優先しつつ、プライベートな時間や家事など多様なニーズがあることがわかった。

研究成果の概要（英文） The aim of this study is to examine the awareness of work-life balance (WLB) among the nursing personnel at a university hospital in Japan. A questionnaire was sent to 1,236 nursing personnel working at a university hospital and 1,081 (87.5%) responses received. The result can be summarised as follows: ( ) The concept and significance of WLB has not yet been established among nurses in Japan, ( ) Three factors were found which nurses need as working environment, 1st Quality of life benefits, 2nd flexible working style, 3rd lifelong learning, ( ) Nurses who reported good WLB also reported higher job satisfaction and job motivation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：基礎看護学

キーワード：潜在看護師、セカンドキャリア、就労支援、ワーク・ライフ・バランス

## 1. 研究開始当初の背景

英国、米国などの先進諸国では、看護職者の離職、高齢化等による人材不足から外

国人労働者を恒常的に導入する政策がとられている (James Buchan, International nurse mobility, WHO 2003)。わが国でも、

平成 18 年 9 月フィリピンと、平成 20 年 7 月にはインドネシアとの経済連携協定 (EPA) が締結され、外国人看護職者が日本の医療の一部を担う可能性がでてきた。しかし、外国人看護職者の導入は、相手国の保健医療に必要な熟練労働者を引き抜くことを意味し、国際経済上のメリットはあっても二国間の持続可能な保健医療提供体制を考えると適切な政策とはいえない側面がある。したがって自国において安定的な供給と質を保障する看護職者の人材確保のあり方が検討される必要がある。

わが国では少子高齢化が進展しているにも関わらず依然として大規模病院の看護職者は 20 代、30 代を中心とする就労構造にあり、早期離職、雇用のミスマッチ、長時間労働等を要因として人材不足が問題となっている。平成 18 年度の診療報酬の改定は、看護師の人材不足を加速させ、今日、看護職者の就労継続（定着促進と言い換えることもできる）と潜在看護職者の復職が大きな課題となっている。ところが、即戦力を求める求人側は離職期間の長い潜在看護職者を敬遠する傾向があり、とりわけ中高年看護職者の場合、高齢者雇用安定法の改正にもかかわらず採用の現実的場面で加齢による影響から不採用とされることがあり、一旦離職すると復職が極めて難しく何らかの抜本的対策が必要である（田中・吉原他、セカンドキャリア人材活用のための求人側の実態調査、2005）。

しかし、潜在看護職者の活用や、中高年看護職者の就労促進の有効な対策は国際的にも確立しているとは言えず、特に生涯学習も含む総合的な就労支援策は十分ではない。また、雇用のミスマッチも就労条件のミスマッチは指摘されているものの、求人側の人材に対する期待と求職者の考

え方のズレがどこにあるのか、求職者はどのような戦略をとる必要があるのかなど、ミスマッチ分析は十分にはされていない。

## 2. 研究の目的

(1) 病院における潜在看護師の就労支援講習会の現状と課題を明らかにする。

(2) 地域のナースセンターに登録している潜在看護職者がこれまでどのように働いてきたのか仕事と生活観を把握するためのキャリア・ヒストリーと就労ニーズを明らかにする。

(3) 大学病院の看護職者を対象に、ワーク・ライフ・バランスに対する認識を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) ホームページ、新聞、タウン誌等から潜在看護師研修会を実施していることが確認された病院 101 か所を対象に、病院の属性、講習会の開催数、講習期間、受講料、講習会の内容など開催状況について自記式質問紙を送付、調査した。

(2) A 県看護協会ナースセンターに登録している看護職者 162 名に、個人属性、離職理由、希望する就業環境、研修など必要な支援などについて自記式質問紙を送付、調査した。

(3) 首都圏の大学病院に勤務する看護職者 1,236 名を対象に、個人属性、希望する働き方、健康感、意欲、ワークライフバランスについて自記式質問紙を送付、調査した。

## 4. 研究成果

(1) 潜在看護職者の就労支援策の 1 つであ

る病院における潜在看護師就労支援講習会は、2006年～2007年にかけて急増しており、2008年現在、少なくとも101か所の病院で実施されていることがわかった。回答した61病院は、講習会の開催にあたって受講者の確保に最も苦労しており、講習会を担当する人材は専任ではなく、看護業務と掛け持ちで行っており、かなり負担がかかっていることが推測された。一方で、病院が潜在看護職者のニーズを踏まえながら講習会を実施していることがわかった。受講料は無料のところが多く、自前で行っているところが多く、その点でも負担がかかっていることが推測された。以上から病院が単独で行うよりも、地域の病院や教育機関、看護協会が連携して行うことで、負担を減らしそれぞれの強みを活かした講習が継続して行える可能性が示唆された。

(2) 看護職を継続していくための就労環境としては、既婚者は未婚者よりも、短時間勤務を希望し、出退勤時間の柔軟な調整の希望は、既婚者、離死別者が未婚者よりも高かった。年齢で分類し、50歳未満と50歳以上とを比較すると、50歳未満では、育児休暇や保育所を利用できる環境を、50歳以上では介護休暇を希望していた。家族・婚姻状況や年代によって多様なニーズが確認された。したがって、個々の家庭環境、ライフ・イベント、生活状況など異なる背景をもつ看護職者が、同じ「看護」という仕事を継続していくには、就業しやすい環境を整えていくことが重要となる。施設側がワーク・ライフ・バランスを考慮した労働環境の整備を進めていくと同時に、看護の仕事について家族の理解を得ることの必要性が示唆された。看護師の離転職の理由には、職場の問題に自分自身の問題が重なっており、育児と両立する働き方を求

めていることがわかった。就労条件に求人側と求職者側にミスマッチが生じており、現在広く使われているネット検索による求人・求職活動の限界も明らかになった。ミスマッチの軽減には、求人側と求職者側双方が直接対話をして、お互いのニーズを理解し、妥協点・修正点を見出していくことが必要である。

(3) 「ワーク・ライフ・バランス」の言葉を知っている人はわずか、45人(4.2%)で、生活の優先順位の理想と現実には大きなギャップが認められ、現実には仕事を中心にしているが、プライベートな時間や家事など多様なニーズがあることがわかった。仕事に満足している者、意欲のある者のワーク・ライフ・バランスは良好で、仕事への満足感と意欲には有意な相関が認められた。バランスがとれているかどうか、という個人の主観を肯定的なものにするには、看護職者が仕事を肯定的に捉えることが重要であり、労働環境の整備のほか、職場のコミュニケーションを良くし、ワーク・ライフ・バランスの重要性や意義を共有できること、生涯学習を取り入れ、やりがいを持つ職場に変えていくことが重要である。この研究成果は、Working condition of nurses in Japan: Awareness of Work-Life Balance among nursing personnel at a University Hospital として Journal of Clinical Nursing に投稿、平成22年5月20日掲載が決定している(論文番号 JCN2009-0582)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Sachiko Tanaka, Yukie Maruyama,

Hiroataka Ito, Satoko Ooshima:  
Working condition of nurses in  
Japan: Awareness of Work-Life  
Balance among nursing personnel at  
a University Hospital, Journal of  
Clinical Nursing 査読有 (In press)  
荒井 郁、田中幸子、大嶋聡子、伊藤嘉  
高、丸山幸恵：潜在看護師の就労支援研  
究の現状と課題、人材育成学会第7回年  
次大会論文集,東京；63-68（2009）査読  
無

〔学会発表〕(計4件)

荒井 郁、田中幸子、大嶋聡子、伊藤嘉  
高、丸山幸恵：潜在看護師の就労支援研  
究の現状と課題、第7回人材育成学会年  
次大会、2009年、12月13日、東京  
田中幸子：ワーク・ライフ・バランス施  
策に期待される生涯現役社会の構築、シ  
ンポジウム「ワーク・ライフ・バランス」  
第63回国立総合医学会、2009年10月  
24日、仙台

Sachiko Tanaka, Satoko Ooshima,  
Sayoko Iida: Nurse's Attituded to  
reconciliation work and private life of a  
University Hospital in Japan(看護職者  
のワーク・ライフ・バランスに関する認  
識～日本の1大学病院の事例～、日中韓  
看護学会、2009年、8月17日、北京)

Sachiko Tanaka: Working condition of  
nurses in Japan Reconciliation work  
and private life. Hawaii Seminar on  
Nursing Workforce and Labour Market  
Research, March 25 –March 27  
2009,Hawaii

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田中 幸子 (TANAKA SACHIKO)

山形大学・医学部・教授

研究者番号: 20286371

### (2) 研究分担者

坂口 千鶴 (SAKAGUCHI CHIZURU)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号: 60248862

(H19 H20 連携研究者)

吉原 直樹 (YOSHIHARA NAOKI)

東北大学・文学部・教授

研究者番号: 40240345

(H19 H20 連携研究者)